

目次

双

本朝妖怪盛衰録

お六

道

中

豆

腐

てんみくろくちまほり

小

僧



前口上……………6

その一 裏街道の豆腐小僧……………18

その二 昔むかしの蟹坊主……………42

その三 蟹と鴉と飯綱権現……………64

その四 狸と天狗と天吊るし……………98

その五 山師贗巫女鈍感男……………126

その六 憑物落としと豆腐小僧……………168

その七 カンチキチンと豆腐小僧……………188

その八 八牛と狸と豆腐小僧……………222

その九 消えてしまった豆腐小僧……………242

その十 達磨カンチキ小豆そぎ……………284

その十一 そして誰もいなくなった……………314

その十二 小僧の留守の狐と狸……………348

その十三 昔むかしの八百八狸……………368

その十四 贗隠密と臆病草……………408

その十五 山流し天吊るし……………436

その十六 帰って来た豆腐小僧……………458

その十七 河童小僧になりました……………488

その十八 化け猫化け牛化け狐……………530

その十九 夜明けにお化け早駆けす……………558

その二十 豆腐小僧でございます……………600

豆

腐

小

僧



装幀—坂野公一 (kunitada design)
 装画—石黒亜矢子



本朝妖怪盛衰録

双

お六

道

中

さて、懲りずに妖怪のお話をさせて戴きます。

懲りずになどと申しますのには理由がございます。実を申しますと、これからお話しさせて戴きます、ま、箸にも棒にも掛かりませんくだらない物語には、前がございまして——ああ、前があると申しましても前科があるという意味ではございません。これはそうした物騒なお話ではございませんで、要するにこれからさせて戴きます物語は、あるお話の続きでございと、そう申し上げておる次第でございますな。と——申しましても、その前のお話の顛末をご存じなければお解り戴けない話なのかと申しますと、それでもございませぬ。

それはもう、何もお知りにならずとも、どこからお読み戴いても、どこでお止めになるうとも結構な、戯言、遊言でございます。所詮お化けのお話でございますから、読まなければ時流に乗り遅れてしまいますとか、ご婦人や殿方に嫌われてしまいますとか、お子達に馬鹿にされてしまいますとか、そうしたことも一切ございませぬ。

と——申しますより、その逆は多少はあるやもしれませぬな。

つまり、お読みになりますと時流に取り残される、殿方ご婦人に軽蔑される、お子達に嗤われる——そうした可能性は大きゅうございまして——。

そこはまあ、妖怪のお話でございますから、ご勘弁戴きたく思いますな。

ご心配な方はお読みになられたことをご内密にして戴ければ宜しいかと存じます。はい。

さて、何も知らずとも結構と申しました舌の根が乾かぬうちにこのようなことを申し上げるのは甚だ心苦しいのはございますが——ただ一つ、この物語をお読み戴く前にお知らせしておかねばならぬ事柄というのがございます。

はい、これはお化けのお話でございますから、お化けが沢山出て参ります。お化けが歩いたり走ったり転んだり喋ったり考えたり致します。しかし、現実にお化けがおりませんように、お話の中もお化けはおりませぬ。

おらんもんが何で転けたり笑たりすんねんな、と仰せでございませう？

ご尤も。これは、喩えでございます。

お化けと申しますのは實在致しません。非存在でございます。これは作中でも当然、非存在でございます。非存在でございますから、物理的質量を持つておりませんし、物理的作用を及ぼすことも一切まなりません。でも、いることになっております。

そりや靈魂とか心霊とか、その手のもんかい、とお思いの方。

そういう方も少なからずいらつしやるかと存じます次第ではございますけれども、それも違っております。そんなもんは、余計にございませぬ。いないもんはいませぬ。

作中におきましても霊なんざいない、不思議なことなんざないという明々白々なルールだけは守られております——。

じゃあどうやってお化けが出んねん、と仰せてございますな。

これまたご尤も。ですから、このお話で活躍致しますお化けども、これは概念で

ございます。

お化けと申しますものは——幽霊なんかも含みますけれども——これ、大雑把に述べますと、文化的存在と申すことが出来ましような。

世の中には理解の及ばぬ現象やら、子細あつて曲解したい事象やら、都合の悪い出来ごとなんぞが沢山たくさんございます。人と申しますものは、そうしたことを誤魔化ごまかすように出来ております。まあ、無理な解釈を致したり、妙な説明を致したり、怖がりたくないから何かの所為せいにしてしまつたりする訳ですな。そういう色々な人の思いが捏ね上げました妄念まがまがやら小理屈こりくつなんか、お化けのそもそもでございます。その辺から生まれまして、長い月日をかけてまして醸造じょうぞうされました様々なモノが、妖怪ばけものと呼ばれる訳でございますな。

ですから、まあいい、という形でいる訳でございます——その辺が、喩えなのでございますな。

これは——擬人化とは微妙に違つております。

動物やら器物を人に擬えなぞらまして、お話をさせたり活躍させる物語も多くございますが、このお話はそういうものとも少々違つております。

例えば林檎りんごを擬人化りじんかさせます場合、多くは「この林檎」ちゃんが人間のよう意志を持つて活躍したり致します。別の林檎が登場しました場合、それは「もうひとつの林檎」ちゃんでございます。

ところがこのお話に登場致しますお化けは一部の例外を除きまして、個体とは関係ない「林檎」という概念「ちゃんな訳でございます、物体としての林檎はちゃんと別でございます。それは、まあ普通の林檎な訳でございます。

ですからこのお話は、「腹が減つた」君が歩いておりまして、「少し嬉しい」さんと出会つて口喧嘩くげんかをしたと、そういうような、まことに馬鹿馬鹿しいお話なのでございまして——。

解り難い？

はあ、甚だしく解り難いかと存じますな。

とはいえ、理屈ばかり諄々くつくと述べておりまして始まりません。そもそもその理屈が大層たいそうややこしゆうございますから、それだけで終わつてしまい兼ねません。

何よりこれでは面白くございませんな。ですから、とつと先に進めさせて戴きたいと存じます。その辺りの事情は、お話が進むに連れて追追にお分かり戴けるような仕組みになつてもおりまして——。

それはさておき

閑話休題

最初の場面は街道でございます。

くだらないお話でも一応、時代設定のようなものはございまして、これはまあ江戸時代の終わりぐらいのお話とお心得ください。

そんな頃でございませすから、まあ大方の人は鬘を結っております。で、和服でございませす。乗り物も駕籠か馬くらいでございまして、当然乍ら携帯電話もパソコンもございませせん。尤も厳密な時代考証は必要ございませせん。まあ、俗に謂う幕末でございます。

で——街道と申しましてもどうやら正規の街道ではございませせん。もちろん舗装もされておりませんし、今でいうならただの山道、その道を男が二人連れで歩いております。この時代は現在と違ひまして気軽に旅行など出来やしません。そりやあもう沢山歩かなければいけませんし、道の方も悪うございませすから、旅する者は旅装束と申しまして、それなりの恰好を致しております。ところが、この二人は旅装束ではございませせん。

一人は兜巾に鈴掛、結袈裟を身に纏ひまして手には錫杖、背に笈を担いでおります。何のことやらとお思いでございませす。これは、絵に見る山伏の姿とお考えください。髪は総髪、目つきは鋭く、足運びにも隙はございませせん。

如何にもひと癖ありそうな男でございませす。これは山岳修行者のスタイルでございませすから、街道を行くにもそれ程不自然な恰好ではございませせん。

問題は、もう一人でございませすな。

これ、まず人間としてどこか間違つております。

右脚の膝と左脚の膝が大層離れておりますな。真つ直ぐ立っておりますも、左右の膝の間を通してキャッチボールが可能な程でございませす。

平つたく申しますと蟹股なのでございませすな。

いえいえ、それが悪いと申し上げます。それは欠点ではなく単なる身体的特徴でございませす。○脚だからといって別に責められるような謂れはこの男にもございませすまい。

ただ、この男の場合は、歩き方から息の吸い方吐き方に至るまで、悉く品がないのでございませす。加えて大いなる猫背でもございませす。首は前に突き出されております。脚の振り上げ方も下品。振り下ろし方も下品。おまけに動きが不真面目でございませす。身体的特徴をカバーするどころか、より強調するような方向で主に活動しておる次第でございませすな。見た目に対する頓着は、皆無といえませす。まあ、潔いと申しますれば潔いなり方でもございませす。別に構わないといえは構わないことな訳でございませす。その野卑な在り方はどうなんだよと、こう申し上げております次第で——。

服装は、これが薄汚い野良着。木の枝に、これまた小汚い風呂敷を括り付けまして、肩に担いでおりますな。誰が見たつて不潔でございませす。

で、顔でございませす。

月代は剃つておりますが、いつ剃つたのか判りませせん。頭部にはもやもやと産毛がこんがらかつておりました。そこに貧弱な鬚がべたんとへばりついております。眼は厚ぼつたい奥二重、口の周りには無精髭。そして顔の真ん中には——。

巨大な穴がニアつ。異様に鼻孔が大きくゆうございませすな。そこから大量に空気が漏れます。これが突風。全体的には貧相で、痩せてもおりますが、懐だけが異常に膨らんでおります。懐に——どうやら猫が入つてるのでございませす。

②③④
⑤⑥⑦
⑧⑨⑩
⑪⑫⑬
⑭⑮⑯
⑰⑱⑲
⑳㉑㉒
㉓㉔㉕
㉖㉗㉘
㉙㉚㉛
㉜㉝㉞
㉟㊱㊲
㊳㊴㊵
㊶㊷㊸
㊹㊺㊻
㊼㊽㊾
㊿

そんなのが、山伏姿の男の後ろにドタバタと続いておる訳でございまして——。

で。

山伏の方の名は、飯綱いづな使いの玄角げんかくと申します。

イヅナと申しますのは一種の靈獸つまきのでございませぬ。憑物つきのものであり、狐であり、全国でもナンバースリーの天狗・飯綱三郎いづなさんろうでもあり、火伏せの靈驗れんげんも灼かな飯綱いづな権現けんげんと申します神様でもございませぬ。此奴こやつはそれを奉り、また使役しやくして奇跡きせきを起こす民間宗教者しんじょうしやでございませぬ。

ただ、修行者と申しますのは表の顔。この男、修行などしておりませぬし、信仰心も持つておりませぬ。而してその実体は——と、些いささか古めかしく申し上げますれば、この玄角、詐欺しやぎまがいの香具師かぐしであり、大道芸だうだうげいやら辻占つじうらやら、怪しい見世物みせものを生業なりわいとし、忍び——情報しやうほう蒐集しゆじゆから泥棒どろぼうまで致すという、所謂いむゆる小悪党せうあくどうでございませぬ。

そしてもう一人の、鼻の孔あなのでつかいみつともない男でございませぬが——。

これ、元は武州ぶしゅうの百姓ひやくしやうでございまして、名前を権太ごんたと申します。この権太、棍棒こんぼうで思いぎり後ろ頭うしろかみを殴りまして、三日後に痛がって振り向く程の鈍感者どんかんしや。デリカシーもなければ配慮はいりもない。世に無神経むしんけいという言葉がございませぬが、それはこの男のためにあるような言葉でございませぬ。

この権太、かの近藤こんどう勇ゆうに影響いんげいを受けまして、サテ武士にでもなるべえとのこの江戸まで参りまして、ちゃっかりさる道場みちばへと潜り込み、先だつてまで雑用ざつようなどをしております男。近藤勇も元を辿れば武州の百姓ひやくしやう。あれが武士になれたなら、オラだつてなれるべえという算段さんだんだつた訳でございませぬ。

ところが、この権太、どこでどう間違まちがえましたものか、やつと、ではなく国学こくがくを学んでしまいます。で、これまたどこでどう間違まちがえましたものか、教しやうえを曲解まがしてしまいますな。何をどう思い違まちがつたか、どの辺へをどう思い込んだか、その辺りのことは本人ほんじんにしか解とけますまいが、この権太、国学こくがくを学んだ末すえに天狗てんぐの弟子でしになることを決意けつぎ致いたしました。

選よりによつて天狗てんぐの弟子でしでございませぬ。

まあ大馬鹿おほおろでございませぬ。

この権太と申します男、天下一てんかいつの鈍感どんかん無神経むしんけいでございませぬから、本来ほんらい幽霊ゆうりやう妖怪やかいの類たぐいはまつたく信じておりませぬ。靈感れんげんどころか悪い予感よかんもしやしない。風邪かぜを引いても悪寒あくかんがしない。頭あたまから冷水れいすいをぶつかけても三日後さんじつごにおやと上うへを向くといい程ほどの男。

それがどういふ訳わけだか天狗てんぐだけは信じてしまいます。しかも弟子でし入りしたいと一念いっぴん発起はつししてしまつた訳わけでございませぬ。まあ、そうは申しまして権太ごんたの動機どうきと申しますのは著あしく不純ふじゆんなものでございまして、要するに仙術せんじゆつのようなものを身につけて不老不死ふろふしになり、楽たのに愉たのしく暮くらそう——というだけの話わでございませぬ。

それでも本気ほんきでございませぬ。虚仮こけの一念岩いっぴんいをも通すと申しますけれども、しかしこればかりはどうにもなりません。天狗てんぐは、まあその辺へにはおりませぬ。と申しますか、どこにもおりませぬ。まあ、そこいらにはいないもんだらうくらいのことことは権太ごんたの馬鹿ばかでも承知しやうちしております。この権太ごんた、果たして誰たれに聞きましたのか、天狗てんぐは出羽でわ近辺きんぺんに棲息せいそくしていると思おもい込んでおりますな。

で——偶たまか出羽に用向きがあるという玄角と、これまた偶然に知り合ってしまった訳でございます。玄角は先に申しました通り天狗の名門でもあります飯綱権現を守護神に感得しておる人物でございます。それを知りました権太、これ幸いと玄角の後ろにくつつきまして、ドタバタ出羽までの道を歩んでいると——まあこういう次第でございます。

長長とご説明して参りましたがこの二人、主役でも何でもございませぬ。脇役でございます。いいえ、寧ろ端役でございましょうな。

一寸待まちて、端役の説明にこんなに真を割くなというご意見もございませぬでしょうが、これは致し方ございませぬ。

何故なら、主役はいないからでございます。

主役不在でどうするか——と仰おつしやいますな。

不在ではありますが、いることはいるのでございます。先に申しました通り、このお話の主役は非存在でございます。存在しないという形であるのでございますな。このお話の主役、ちゃんといるのでございますが、存在はしない訳でございます。

山伏玄角の後ろにおります馬鹿権太のその後ろ。

何にもおりませぬ。

何もないのですから、もちろん何も見えませぬ。音もしないし匂いもしない。気配もなければ何もない。ないので、これは当然。

しかし——。

権太の背後に、実は少しばかり困った概念おぼけがくつついて、つかず離れず歩いておるのでございます。

これは、お化けでございますから、本来であればどなた様かが観想しなければ浦くものではございませぬ。

例えば「鼻の頭が痒い」と申します概念は、どなた様かが痒いとお思になるからこそ発生し、成立する訳でございますな。そう思う主体がいなくて、その鼻の頭が痒い”は発生しようがございませぬ。痒がる主体がいて、その主体に鼻があつて、その鼻が痒くなつて初めて、「鼻の頭が痒い”は成り立つのでございます。誰もいないところにポコンと「鼻の頭が痒い”だけがある、というのは、やはり考え難にくうございます。

お化けも同じでございます。

主体となる方がいらつしやつて、その主体が怖がるなり驚くなりして、それを解釈したり説明したりすることで、漸ようやくお化けは成立致します。人のいないところにお化けはおりませぬ。仮令たとえ怖がる主体がいても、解釈したり説明したりする文化なくしては、やはりお化けは出られないのでございます。主体なきところにお化けは涌きませぬ。そのうえ、涌いてもすぐに消えてしまうもの。

ところが。

この、権太の後ろにおりますお化け、困ったことに誰も観想していかないにも拘かからず、涌ぼなぎつ放はなして消えないのでございます。

先だつて一度涌いてからというものの、どういう訳かずうつといるのでございます。いえ、いるのですが存在はしておらず、だから権太も玄角も、そんなものが背後からくつついて来ていることは知りません。と、申しますより何もくつついて来ではない訳でございます。

語れば語る程、苛々して来るお話でございます。

まあ、いないのにおりますそれは、取り敢えず小僧でございます。小僧というくらいでございますから、童形——子供の姿をしている訳でございますな。

まあ、姿形といつても、ないのでございますが。

で、お化けでございますから、当然ただの子供ではございません。とびきり頭が大きいでございます。その大頭に、襦袢な笠をば被っております。で、服装はと申しますと、結構お洒落でございます。狗やら太鼓やら達磨やら、様々な玩具の柄が染め付けられました単衣を纏っております。

顔つきは、まあ間抜けの一言で片づいてしまいます。何とも間延びした、緊張感のない面構えでございます。笑っている訳ではございませんが、見た者は笑つてしまうようなご面相と申し上げれば宜しいでしょうか。

この小僧、そのご面相にびつたりの、どうにも妙な歩き方を致します。片足を曲げましてぴよんと右へ跳ね、また左へ跳ねて前進致しますな。愛嬌があるという見方も出来ましようが、まあ抜けておりましよう。

でも——。

どれだけ抜けていたところで、それだけならばただの小僧でございます。

ただの小僧ではお化けになりません。普通の小僧なんてお化けはいない訳でございます。頑張ったところで幽霊でございますして、この場合は個人が特定されまじし、もつと哀れだったり恨みがまじかったりする訳でございます。こんな誰でもない小僧、しかも間抜け、なんて幽霊はおりませんな。

はい、この小僧、一応お化けでございますから、やはり普通の小僧とは違つておりまして——。

円いお盆を持っております。頑なに持っております。それはもう全身全霊を傾けて持つております。でもつて、その盆の上には、白くて四角い豆腐が載つております。紅葉の模様が印されました、瑞々しい豆腐でございます。

これこそが、この小僧の存在理由なのでございます。

この小僧、人呼んで——。

豆腐小僧と申します。

この豆腐小僧が、このお話の主人公なのでございます。

まあ、何ともはや、情けない主役があつたものでございます。何しろ端役にさえ気づいて貰えないのでございます。またこの容姿でございますし、そもそも存在しない訳でございますから、活躍の仕様もございません。今後どんな展開があろうとも、胸の透く活劇も胸焦がすロオマンヌも、なーんにも期待が出来ない訳でございますが、取り敢えず主役は主役ということでご勘弁くださいませ。

と、いう訳で——。

その一 裏街道の豆腐小僧

◎◎◎
◎◎◎

さて。

我らが主人公・豆腐小僧でございますが、果たして何故に街道なんぞを歩いているのでございましょうか。

玄角は、何やら知れませんが用向きがあつて出羽に向かつておる様子。馬鹿の権太は天狗の弟子になりたい一心でその後を追っております。この権太、玄角を天狗の弟子と勘違いしている節もありまして、つまりは押しかけの弟弟子のつもりでございましょう。

此処までは、まあ宜しゅうございます。

小悪党に馬鹿が絡もうが不細工が引つ掛かろうが別段どうでもよいこととございまして、そのくらのことはよくある話でもございましょう。

しかし豆腐小僧がその後ろに連なつてしていると申しますのは——これ、問題でございます。

妖怪は主体性を持ちません。非存在であるお化けは人間が観想しない限りはない、訳でございます。自主的に行動を起こすことは考え難い——と、申しますか不可能なのでございますな。

ですから、井戸端いどぼたに出るお化けは井戸端にしか出現致しません。山の怪は海には現れませんし、便所のお化けは居間には涌きません。

お化けは移動しないのでございます。

幽霊などの場合は、これ移動しそうな雰囲気でございますが、実を申せばこれは移動致しません。幽霊を感得する人間が移動するだけでございます。そもそも幽霊は死人の靈魂なんかではございません。

生きている人間が、さう見るだけのモノでございますから、いつてみればお化けの出現は一種の「反応」でございます。反応に意志などあるはずもなく、ならば人間と無関係に移動することも出来ませぬ。

ところがこの小僧、誰にも観想されておらぬのに消えもせぬ——というだけでなく、自らの意志を以て行動している様子でございます。

お化けが長距離を移動するなど——しかも自らの意志で移動するなどということ、まさに前代未聞。古今未曾有。画期的革命的な出来ごとなのでございます。

とはいうものの、どう持ち上げてみても一文の得もない間抜け面。おまけに大きただけで中身は空っぽという鳥頭とりがしら。権太に負けず劣らずの馬鹿小僧でございますから、そうした自覚は一切ございません。

ただ歩いておりますな。

斯様な次第でございますから、そもそもどこを歩いているのか、どこに向かつているのかも無自覚に等しい訳でございます。まあ、見た目も散歩と変わりありません。既に結構な距離を歩んでおりますが、疲れる様子も一切ございません。

ま、実在しない概念でございますから、疲れる方がどうかしておる訳でございますが、それにしたつて暢気過ぎる道中でございます。

鼻歌何ぞを唄つたりも致します。

豆腐小僧は江戸の生まれ、しかも黄表紙などという、多少如何わしい読み物で多く扱われたお化けでございますから、知らずとも良い端唄なども知っておりますように——。

「おいこら」

突如声が聞こえます。もちろん人間には聞こえません。概念が概念に話しかけているのでございます。声は小僧の着物の柄から聞こえております。

「やめろ小僧」

やめませんな。

景色が良いので浮かれております。

いい加減にせえ——と厳しい声を発しまして、小僧の着物の柄の一部——達磨さんの絵が着物から抜け出まして、小僧の前に立ちはだかりますな。

達磨が立つんかい、と仰いますな。この達磨、手足が生えております。

手足があつたら達磨ちやうやんけ、とも仰いますな。これ、れっきとした妖怪でございます。名前を滑稽達磨と申しまして、要するに張り子の小達磨に手足が生えたようなもの——ような、と申しますかそのまんま、でございます。戯れ絵の中で描かれました巫山戯た達磨でございます。

達磨、手にした払子をさつと振りまして通せんぼを致します。

「止まれと申しておるが聞こえぬかこの馬鹿小僧」

「はあ」

主役の初科白が、はあ、でございます。情けないこと極まりない。

「はあではないわ。何じゃその下品な唄は」

「さあ。唄の題名なんか知りませんよう。それより達磨先生、短い脚広げて、いったいどうしたんでございますか？」

豆腐小僧、この小達磨を師と仰いでおります。

まあ痩せても枯れても取り敢えず達磨に違いはございませんな。禅宗の始祖、瘡除けの呪具、縁起物、子供の玩具、戯れ絵と、どうにも転落の一途を辿ってはいる訳でございますが、一応現在もそれらの属性を兼ね備えておりますから、まあ物知りではございますようで——。

「どうしたんですかだとオ」

達磨は睨み付きますな。

睨むのは十八番でございます。

「どうしたもこうしたもあるか。あんな、愚僧は既に何十遍、何百遍とお前に問うておるではないか。いったい何処へ行くのだ？」

「はあ。別に」

「また別にか」

「あら」

権太が角を曲がります。

見失つては大変と、小僧は駆け出します。達磨はちよこまかと後を追ひ、蚤のようには跳ねまして小僧の肩口に留まります。

「走るなよ。お化けが走るって変ではないか」

「だつて見失つてしまいますよ」

「だからよ。あの田舎者を見失うとどうだというのだよ」

「道が判らなくなります」

「あんな」

達磨、苦渋の表情を浮かべます。

「道——判らなくなつていいじゃないかよ」

「迷いますよ」

「おいコラ小僧。よオツク聞け。良いか、まず目的地があつて、そこに向けて移動中に最適な経路が不明になつて、結果目的地に辿り着くことが困難になつてしまつた状態こそを、迷うというのである」

「へえ」

「へえじゃないぞ。お前の場合にはな、そもそも目的地がない」

「はあ」

「従つて最適な経路もへつたくれもない」

「ほう」

「だから迷いようがないのだ馬鹿」

「ひい」

最後の悲鳴は払子でぶたれております。

「そもそもお化け道中なんてのは変である。間違つておる」

「そうは仰いますがね、達磨先生。手前は豆腐小僧でございますよ」

「左様。誰が何時何処でどんな風に見たとしても、明々白々に豆腐小僧である。だからこそ、こんな山道にいるのはおかしいと言つてゐるのだ。お前は江戸の暗がりにも踊くものであろう。月夜の晩に笠を被りて、盆の上には豆腐を載せ、片足でぴよんと跳ねるは——」

豆腐小僧にござりまするウ——と、小僧ポーズをとりますな。

癖でございます。

「当て振りは止さんか馬鹿。愚僧が転げ落ちるではないか」

「だ、達磨さんは転ぶもので」

「つまらんことを申すな。だから、愚僧が最前から申しておるのはだな、その、江戸のお化けの豆腐小僧がだよ。何が悲しゅうてこんな真つ昼間に山ん中の道を愉しそくに闊歩しておるのか——ということなのである。しかも、しかもだ。何じやその鼻歌は」

「はあ。まあ、つい」

「楽しいのか山？ 嬉しいのか道？ お化けの風上にもおけんわ。武州を出てから何日経つておるといふのだ。来る日も来る日もおなじように浮かれおつて。あんな、武州ならまだ江戸の近郊だからお前がいてもそう違和感がないがな、ここはもう——甲州ではないか」

どうやら此奴らのおります場所は現在の山梨県のようにでございます。

小僧、うわあ、などと申しまして辺りを見渡しますな。

「この道はこおしゅうという道なんでございますか。眺めがいいですねえ」
「み、道の名じゃないわい。どうでもいいが、おかしからやめろ、と申しておるのだ」

「でも先生」

小僧、横目で達磨を眺めます。顔が大きくうございませすから、己の肩口は見難いようでございますな。

「手前は絵草紙妖怪だと、先生は仰いましたね？」

「そうである。お前は愚僧と同じ戯れ絵の創作お化けじゃ」

「そういうのは地域限定じゃあないんだと——先生、以前に仰ってたじゃないですかあ」

それはそうなのでございます。

例えば民間伝承などで語られますお化けと申しますのは、語られる地域にしか出ようがございません。他の地域の方々は知らないでございます。また、土地と結びついて語られます怪異の類たぐいも多おほございませすから、そうしたのも他地域では見られない訳でございます。

地域を跨またいで広域で起きる怪異の場合も、場所場所で名前や形が違ってしまったり、正体が別のモノになってしまったり致します。こうなりますと、同じ現象でありまして、お化けとしては別物になってしまいがちですな。

ところが、絵に描かれたり文章に記されたり致しますと、事情が少々違って参ります。

この場合は他地域でも認識可能になる訳でございますして、印刷複製されて頒布されたり致しますと、途端に出現範囲が広くなる訳でございます。絵本になって諸国にばら撒まかれたり致しますと、一気に全国区のお化けになったりも致します。

違ちがうわ、駄目だわいと達磨は申します。

「慥たつたかにお前は地域限定のお化けじゃあない。ないがな、お前は江戸の、しかも町の中に、しかも夜に出るといふ設定が記されたうえで、諸国に知られておるお化けなのだ。一転して、だ。ここは甲州の山奥で、今は昼間だ。全然設定と違ちがうじゃないか。加えて、こんな山深いところには貸本屋も来ないわ。宿場ならともかく、此こ処は山じゃないか。お前の載のつてる本がその辺に落ちてる訳もないし、落おちてたつて猿さるが齧かむるくらいである。駄目である。駄目」

駄目ですかあと小僧しよ萎しおれます。

「でも、駄目といわれましてもねえ。手前はこうしている訳ですし」

いるんだよなあ——と、達磨は太い眉毛まゆげをヒン曲まげます。

「いまだに納得出来んわい。お前、何故消えないのだろうな」

「ね？ ですからね、達磨先生、手前は現にこうしている訳で、しかも手前は豆腐小僧でございますから——お化けと雖いまだもこうして豆腐とうふを持って右往左往うさきさきするしか能うないものがございますしよ？」

「能うないものだ。能うナシだ」

「なら、山だろが町だろが、昼だろが夜だろが、こうして豆腐持もって歩あくしかないじゃないですか。どこまでも前を向むいて」

お化けが前向きでどうするよと、達磨いつそう困り顔。

「しかも闇雲に前向いてるだけじゃないか。別にこんなところで前向き必要はないしな。因みに小僧、振り向いてみ」

「へ？」

小僧、すつからかんに馬鹿でございませうから素直に振り向きませうな。

「何もございませんけど」

「もつとちゃんと向け」

こうですか、と小僧身体を返します。

「さて小僧、前はどっちだ？」

「ま、前はこっちですよ」

「じゃあそっちへ行け」

「え？」

小僧混乱致しまして大頭を傾げます。達磨、潰れそうになりますな。

「お、お、おい。頭を戻せよ」

「いや、でも、こっちは今来た道で」

「どつちだろが向いた方が前なんだよ。前向きであることより、どつち向いてるかの方が大事なんだと知れよ。間違った方向いて前向きに頑張った所為で取り返しがつかなくなることは殊の外多いんだから」

それは——多いようございませうな。

小僧、一旦豆腐を見詰めます。

この豆腐、豆腐小僧のアイデンティティーの拠り処——いいえ、お化けの馬鹿小僧に自我があるとすれば、まさに自我そのもの——でございませうな。

小僧、この世に涌きました時から、ずっとこの豆腐を持つております。

片時も、一瞬たりとも手放したことはございません。

と、申しますより、豆腐小僧と申しますのは「豆腐を持つた小僧」という概念なのでございませうから、これはセット——いいえ、豆腐はこれ、込み込みでございませう。謂わば必須条件、デフォルトなのでございませうな。

笠だの着物だのと申しますのは、謂わばオプシオンでございませう。序でに目玉や舌もオプシンのようございませうな。

笠ナシの豆腐小僧というのも描かれておりますし、中には一つ目の豆腐小僧というのもございます。舌が異様に長いのもおりますな。

ただ、豆腐を持つていない豆腐小僧と申しますのは——これはございません。当たり前でございませう。豆腐を持つていなければ、それはただのお遣い小僧、大頭小僧、舌出し小僧、一つ目小僧、その他諸々。色んな小僧になりませう。なりませうが、それらはいずれも豆腐小僧ではございません。しかしどんな恰好の小僧であつても、豆腐さえ持つておりますれば、これは立派な豆腐小僧と相成りませう。

いま達磨に叱責されておりますこの豆腐小僧は、一応フル装備に近いようございませう。数あるオプシオンで欠けておりますのは、腰から下げた帳面くらいのものでございませう。

で——。

◎◎◎

この小僧、豆腐を手放した途端に消えてなくなってしまうのではないかと、始終危惧しておりますな。その不安が、要らぬ自我めいたものを覚醒させてしまった訳でございますな。

◎◎◎

達磨さんはそこがまた気に入らぬ訳でございます。

お化けである以上、涌いて消えるが定めと知れど、達磨は申す訳でございます。いるといつてもいないがお化け、出たッと怖がられましても、所詮はその身は非存在。出たッの瞬間にもう消えている、だからこそのお化け、それがお化けの心意気。お化け心得。元からいないモノが消滅を恐れるは矛盾なりと、さんざ論じた訳でございますが——。

下手に消えなかつたばつかりに——。

いいえ、消えなかつたと申しますと少々語弊がございますな。

こうしている現在もまた、存在していないことに変わりはありませんし、どなたかに知覚されている訳ではございませんから、概念が勝手に固まった、とでも申しましょうか——。

とにかくこの小僧、どうにも扱い難いお化けになってしまいましたようで——。

豆腐がふるふると震えます。

もちろん小僧が盆を揺すっているのでございますが。

「いや、手前はやつぱりこつちに行きます」

小僧廻れ右を致します。達磨、今度は本当に転げ落ちますな。

「いたたた」

概念でも転べば痛い——ような気がするのでございましょうか。

「だから何でだと問うておるのだ」

「何でつて」

達磨、ちょこまかと再び小僧の前に廻ります。

「だからさ。目的はあるのかと尋ねておるのだ。お前に何か目的があると申すのなら、愚僧とて無闇に止めたり致さぬわ。お前がいったい何をしたいのか爽然解らんから、こうやつて危惧し懸念し憂慮し心配し思案しておるのではないか。解らんのか、この親心」

「親心つて、何を恍惚したこと言っちゃつてるですか達磨先生。手前は達磨先生の子ではございませんよう。手前の父は前の妖怪総大将、見越し入道様にございませよ」

これは真実でございます。

「だから——どうでもいいからそつちに行きたい理由を言え」

「む」

「む??」

武者修行でございませよと小僧は申します。

「お前は武者じゃないし、修行つたつて鼻歌唄つて散歩しとるだけじゃないか」

「諸国を行脚致しまして、総大将の倅として恥ずかしくない天下無双の立派なお化けに」

「大馬鹿小僧」

「はい」

「素直に返事をするなよ。あのなア、お化けは武将じゃあないんだから強くなつてどうするよ」

「強い方が良くないですか？」

「良かあないわい。それに強くなつたつてお前は豆腐小僧なんだぞ。豆腐武者とかにはならんぞ？」

「なりませんか」

「ならんわい。なつてどうするか。武者になつたとして豆腐は放さんのだろ。どうやつて槍やら刀やら持つんだよ」

そんな恐ろしいげなもの手前は持ちませんようと小僧は申します。

「それこそ、槍小僧やら刀小僧になつてしまいますよ」

「やつぱり小僧なんじゃないか。じゃあ豆腐小僧でいいだろが」

「ですから、強い豆腐小僧ですよ。いけませんか」

「それつて、何なんだよ。強くぎゆうつと豆腐を持つのか？ 強い豆腐小僧になつて豆腐を楽所持つのかよ。豆腐持たせりや天下無双か？」

それなら今だつて天下無双じゃないかと達磨は申します。

健かにお豆腐屋さんでもこれだけ長時間豆腐を手に行っていることはありませんまいから、豆腐捌きに聞しましてはこの小僧、天下無双に違ひはなからうかと思われますな。

「お化けは能動的なものじゃないのだ。お前が幾ら修行しようと、人間がお前を馬鹿と認識しているうちはお前はただの馬鹿だし、何も出来ない弱虫臆病 腰抜けだと考えているならばお前は弱虫臆病腰抜けへつぽこなのだ」

「へつぽこですか」

「へつぽこじゃないか。特にお前のような絵草紙妖怪はな、何年経とうと何十年経とうと、載つてる本が書き換えられない限りはいつまで経つても同じなのだ。口碑伝承の方は時とともに移ろい変化もするが、お前の載つてる本は何百年経つても同じ内容であろうが。新しくどこかの誰かが、無敵の豪傑豆腐大将とかいう本でも書けば別だがな、書かれたら書かれたでそりやもう別のお化けだろうが。お前は永遠にへつぽこだ」

「へつぽこ——でしようか」

「だからへつぽこじゃないかよ。まあ、お前の載つてる本が読まれなくなつて久しいし、人の記憶から消えるのも遠い将来ではないわ。そうなつたらお前は二度と涌かない。で、どつかの好事家が古い本を引つ張り出して読んだとして、だ。その時はお前、やつぱり」

へつぽこなんでしようよと、小僧頬を膨らませます。

「膨れるなよ。余計に変な面になるではないか」

「どれだけ変でも達磨先生にしか見えませんからね。構いませんよ手前は。もつと変な顔しましょうか。いーッ」

「よ、止せ。愚僧は面白い顔に弱いのだ」

呪めつこに負けますと、達磨は威力半減でございます。達磨の呪力は藪尻の目に籠りましょう。口を開ければ、そこからパワーが抜けてしまうようでございますな。達磨さんは真実、笑うと負けよ——なのでございます。

小僧、達磨が厭がるのが面白くなりまして、思いつきり変な顔で追い掛け回します。両手が塞がっておりますから限界がございますが、もしも手で顔が弄れていたならば、それはもう珍妙な面相になっていたことでありましょう。

達磨、笑いを堪えてちよろちよろと逃げます。

小僧、調子に乗って追いかけますが、そこはそれ。所詮へつぽこでございますから、石か何かに躓きかけて、前につんのめりますな。

小僧、一瞬蒼白になります。

豆腐が盆の上をつつうと滑ります。

際で止まりまして、ぶるんとひと揺れ。

「ほ、ほわあ」

まさに危機一髪。

「ほれみろ。調子に乗るからだ。そもそも物理的な制約のない我らが蹴躓くなんてことは、あろうはずもないことなのだ。ところがお前はそうやって見苦しく転ぶだろうが。それもこれもお前がそういう性質に設定されておるからなのだぞ。お前の属性は、お前の意志で決められるものではないのだ」

「ふう」

小僧、再び膨れます。

「いいんですよへつぽこでも。永遠にへつぽこで構いませんよう。ただ手前は偶か消えることなくこうやって固まっておりますからね、これを機会に見識を広げようと、そう思ってるんでございますよ」

「ほう。空っぽの大頭にしては、まともなことを言うな」

達磨、今度は小僧の着物を攀じ登りまして、笠の上に乗ります。これなら変な顔は見えませんな。

「ええまともですとも。こう見えても手前は、どつかで涌いてから幾人ものお化けの方々と知り合いました、多少なりとも知恵をつけましたからね。友達だつて出来たくらいで。もつともつと沢山のお化けの方に」

「それならあの男は駄目だろ」

達磨、前方を指差します。

見事に開いた蟹股が、品のない運動を繰り返しております。

「あの権太、怖いとか怪しいとか恐れるとか畏まるとか、そういう感情を親の腹の中に忘れて来たかのような鈍感ではないか。それではお化けは感得出来ぬぞ。それが証拠に武州を出てから、お前ただの一匹も妖怪と出会っておるまい」

「お化けが少ないところなんだなあ」と

「違うわ。そんなもん怖がりな人間がひとりでもおつたなら、何処だつて彼処だつてなんぼでも涌くわい。あの権太はな、賢くなくて即物的で想像力もなく鈍感かつ頑迷という、お化けの敵みたくない男だぞ。その証拠に、武州の化け物屋敷を出てからお前が会話した相手といえば、愚僧と、それからあの三毛殿だけではないか」

三毛殿と申しますのは、猫股でございます。いえ、正確には化け猫と呼ぶべきでございましょうか。

これは、権太の懐に丸まって入っております年寄り猫から涌くモノでございませぬ。しかし猫本体とは無関係でございます。猫の方はただの草臥れた古猫でございませぬ。猫股の方はと申しますと。その老猫の怪しげな仕草やら習性やらが喚起させませぬ、やはり概念でございます。

この猫は権太が雑用をしております道場に巣喰っていた猫なのでございませぬが、元はといえば道場主の奥方の猫。飼い主が亡くなつてからどうも化け猫じやないかと疑われておりまして、結果、夕暮れや夜半にお化けとして涌くこととなつた訳でございませぬ。

但し——この化け猫、本体である老猫が『動物の猫』として人間に認識されておりますうちは、出て来ることもままなりません。どれだけ化け物染みていようと、猫は猫。猫を見てきやあと逃げまするのは鼠か、猫アレルギーのお方だけでございませぬ。

と——いう訳で、化け猫の三毛姐さんは本体の猫が眠っている間にのみ、豆腐小僧なんぞの前に立ち現れるという寸法になつております。もちろん、化け猫の方は人間には見えはしませんな。繰り返しますが、これも存在しないモノなのでございませぬ。

するり、と権太の肩口から妖艶な美女が覗きませぬ。

これが件の三毛姐さんでございませぬ。

本体が寝ているのでございませぬ。

この姐さん、古猫の尻尾の先に顕現するのでございませぬ。権太の懐の中からにゅるっと伸びて肩口から顔を出したのでございませぬ。まあ、出たと申しませぬもともといない訳ですから、権太はまったく気づいておりませぬ。

「煩瑣いねえ」

気怠そうに申しますな。

多少眼が吊り上がっておりますし、耳も尖つてはおりますが、これが中々の別嬪でございませぬ。本体は老猫なのでございませぬが、どういふ訳か化け猫は若い女といふのが相場のようにございませぬ——。

お化けなんてモノはお約束で出来上がっておりますから、この場合も婆さんではいけない訳でございませぬ。一時期流行致しました、品川の化け猫遊女辺りの影響が多分に糺じつておるようございませぬ。

「何だい、まアた喧嘩してるのかえ。仕様のないことだねエ」

「喧嘩ではない。喧嘩というのは、概ね対等な力関係にあるものが相争うことを申すのである。愚僧が有り難い説教をし、この馬鹿がそれを拝聴しているというのが正しい」

けらけらと三毛姐さんは笑います。

「達磨さんが説教臭いのは仕方がないことなんだろうけどサ、それにしたつてお粗末な説教節じゃあないか。壁に向かつて九年も座つていただけであつて、無駄なことには心血注ぐなア苦にならない質とみえるねエ」

「どういう意味であるかな」
だからさア——と三毛姐さん、更に身体を伸ばしまして、権太の右肩に横座りになりますな。こうしたお化けは本体から離れることが出来ませんようで、三毛姐さんも尻尾の先で古い耄れ猫と繋がっております。

「そんな唐茄子頭に説教するのは、その辺に落ちてる馬糞に算術教えるようなものだって言ってるのサ。そのくらいのことはお解りだろうに」

「うむ」

達磨、短い腕を組みまして笠の下をばちらと見ますな。

「馬糞の方が早く算術を覚えるかもしれんな」

「ひ、ひどいです」

「酷くない。愚僧も我慢強い事では有名だが、お前と話しておるといつい短気になる。達磨を苛つかせるとは、見上げたへっぼこだ」

「またへっぼこでございますか」

三毛姐さん、三味線を鳴らす様な声で笑いますな。

「おいこらタマ、何を寝惚けておる。こそばゆいでねえか」

これは——実際に空気が振動しております音声でございます。つまり権太の声でございますな。

「そうかあ、きつと腹が空いただな。そうに違いねえだ。おおい、お師匠様ア、止まってくれやあ。飯にすべえ」

玄角、ぴたりと止まります。

「何なんだ」

「何だも神田もねえだよ。猫が腹ア空いたと」

「嘘を吐くな嘘を。空腹の猫がぐうぐう寝るか。寝ているのだろうか」

「まあ寝てはいるだが、寝相が腹ツペらしを報せるだに」

だから嘘を吐くなど言ってるだろうと言つて玄角は嫌々振り向きます。

「おのれが空腹なのだろうが。腹ツペらしはお前だ権太。自分の腹ツペらしを猫の所為にするな。大体猫の餌など歩き乍らやれ。と、いうよりも、猫なんか連れて長旅をするなよ」

「そもいかねえだよ。長いつき合いだしな、ここで放り出してしまつては、飢え死にしまふでねえか」

「野良になるだけだ野良に。そもそもやる餌を持つておるのかおのれは」

「持つてねえから待つてくれと言うとるだよ。解らねえ人だなあ。あんな、オラア替えの禪と僅かな銭しか持ち合わせていねえから」

替えを持つてるなら替えるよ禪——と、玄角は申します。

「か、替えてしまつたら替えがなくなるでねえか」

「洗えよ。大体な、権太。何故儂がオノレなんかと道行きをせねばならぬのだ。儂はオノレと一緒に旅する理由を何一つ持つておらんのだぞ。慥かオラも出羽に行く、ついでに弟子にしてくれと、そういう話ではなかったのか？」

オラ弟子だだよと権太胸を張ります。

どの辺が弟子だと玄角は権太を睨みます。

「弟子というのは何か？ 行く先々で喰い物をせびり、半刻おきに休憩を強要して足止めをし、保存食の干し飯まで喰い潰して、まだ空腹だと言いくさる者のことをいうのか？ それで通るといふなら今すぐ僕も誰かの弟子になるわ」

「だって喰わねば死ぬるし、死ぬば弟子もやれねえだよ。オラあ喰い物は持つてねえし、お前様は持つてる。だから一緒に喰おうやと、オラこう言つてるだがね、間違つてるだか」

「間違つてるよ」

玄角、既に呆れております。と、申しますかこの道中の間、達磨が小僧に呆れたのと同じくらいに、玄角も権太に呆れている訳でございます。

「間違つとるといふこと自体を理解せんのだから詮方ないわい。あのな、権太。つい半刻前もお前は休んで干し飯を喰うたであろう。もう残り僅かじゃ。それに加えて、ほうれ、そつちの方を見てみるがいい」

権太ぼけつと振り返ります。

序でに小僧も振り返りますな。

見事な夕焼けでございます。山並みが茜色に染まつておりますな。

「もうすぐ逢魔刻である。陽が落ちる前に村か宿場まで辿り着かねば難儀することになるのだぞ。狼にでも襲われては敵わんし、そもそもこんな山の裏街道であるからな、微昏くなつてくれれば——化け物が出るぞ」

「出ねえだよ」

にべもありません。

「で、出るかもしれないか。この辺りでは頬撫でと申す怪が起きるのだ。こゝう、誰もおらんに頬をすつと撫でられる。吃驚してその辺の叢から白くて細長い手が——」

小僧、思わず叢を見ます。

そよそよと戦ぐ叢の中に、慥かに手のようなものが確認出来ますな。もちろんそんなものはありません。玄角が申しました言葉を聞いて、小僧が形を観想したまでのこと。

出ねえだよ、と権太が繰り返します。

「そりやお師匠様、錯覚だで。勘違エだよ」

ぶつはつはと権太下品に笑いますな。鼻の穴が開いておりますから笑いにも締まり、というものがございませぬ。

「じゃあな、権太。お前にこの残りの干し飯をやるから、お前ここで喰え。僕は先に行く」

玄角、笈を下ろします。

「そ、そりゃ困るだよ。オラ出羽までの道順を知らねえし、それにオラとタマだけじゃあ旅は出来ねえと思うだ」

賢明でございます。

権太、一応武州の百姓ではございますが、土地を捨て、身分を捨てて遁走した男でございます。動機は違えど逃散百姓と同じようなものでございまして、今や無宿人と変わりのない身分。

一方玄角はそもそも素性の知れぬ者、紛う方なき無宿人と思われませんが、そこは海千山千の小悪党でございます。裏街道の隅々までを知り尽くしている様子。金もない道中手形も何もないという旅を致しますのに、これ程心強い道連れはございませんまい。

出来ないだろうなあと玄角は嫌味たらしく申します。

「じゃあ帰れ」

「帰らねえだよ。オラあ二度と百姓なんかしたくねエだよ」

そう強く申しておりますが、この権太、真面目に農作業をしたことなどただの一度もございません。

まあいつの時代にも、こうした男はいるものでございます。

「侍は別に畑仕事も何もしてねえが威張ってるし、金も持つてるだ。オラ達は泥ン中でひいひい働いて喰うや喰わずでねえか。だからオラあ」

天狗しやんになるだよと、権太再び威張ります。

「天狗しやんになって、働かねえですつと気楽に暮らすだ」

慥かに社会構造の矛盾に端を発しているようでございますが、それでもやはり救い様のない馬鹿者と言わざるを得ませんでしょうな。

権太はだから飯を喰わせろと言いい張り、玄角は武州に帰れと怒鳴ります。玄角はこの先権太が一緒だと拙い、何やら良からぬ用向きがあるのやもしれませんな。同行を許したのも、こんな考えなしの愚か者が真逆本当について来るとは思わなかったからなのかもしれません。

小悪党と馬鹿者が帰れ帰らぬ、喰わせろ喰わせぬの不毛な押し問答を続けておりますその最中、山の方から騒騒とした気配が迫っております。

最初に気がつきましたのは三毛姐さんでございました。

当然本体のタマも気づきましたようで――。

「あ痛たたた、どうしただタマ、これ暴れるな」

権太の動きが余りにも奇つ怪だったので流石の玄角も失笑致します。しかしそこは小悪党、すぐに何かを察しますな。

「権太、除けろ」

権太をぐいと道の端に追い遣りまして、玄角、自分も飛び退き、錫杖を手に身構えます。この男、忍びの術を多少なりとも心得ております。使い手なのでございますな。

馬鹿の権太が三毛姐さんごと横に退いてしまいましたので、道の真ん中にぽつんと取り残されましたのが頭に達磨を乗つけた馬鹿の小僧でございます。

小僧、何が何だか解りませんが、おたおたと足踏みなんか致します。

もちろん豆腐は放しませんな。

へつぽでございます。

達磨は流石に落ち着いたもので、笠の上でゆるりと顔を上げます。

但し、顔も胴も一体型でございますから、単に反つ繰り返っただけなのでございますが――。

そして達磨、団栗眼をぎよぎよつと二回り大きくしたのでございます。